

第14回「日本語大賞」

テーマ 私が^{だいじ}大事にしている言葉

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「挑戦する恐怖すらも楽しむ」

千葉県

千葉県立東葛飾中学校

三年 高橋 美宇

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

いつ頃からだろうか。私はどんなことにでもよく挑戦するようになった。小学生の時の習い事も、児童会長、中学受験も、いつも二つ返事で挑戦してきた。人に何か勧められて断ったことはほとんどない。それは、ある種の好奇心からくるものだと思う。どんなことも聞いた瞬間に、面白そう！私もやってみたい！と思ってしまうのだ。しかし、最近はそのが故の悩みがある。

「挑戦には失敗がつきもの」とよく言われるが、幼少期の頃の私の挑戦の中に「失敗」は存在していなかった。両親や先生が手厚くサポートしてくれていたし、そもそも大きく失敗するようなことに挑戦していなかったからそれもそのはずだ。しかし、最近はそのはいかない。年齢が上がるにつれて、挑戦のスケールも大きくなり、失敗も避けては通れなくなっていくた。「失敗」をしてきた経験が少ない私にとって、「失敗」は不確定で、とてもおっかないもののように感じるのだ。さらに、私は挑戦を決断する時、後先をよく考えず、その瞬間の「やってみよう！」という好奇心だけで決断をする。そのせいで後々になって「失敗」への恐怖が浮かび上がってくることが多い。目標に向かって走り出した途中に、いきなり「失敗」への恐怖が襲いかかってくるからこそ私の悩みである。

最近決断した挑戦と言えば、来年から行くことになった一年間のアメリカの留学だろう。一年間も親元を離れて言語が通じない地で生活するのは、友達とのお泊り会でも少し心配になる私にとって、間違いなく過去最大の挑戦だ。しかし、もちろんこの挑戦をしたくなかったのも単なる好奇心からであつたため、「海外でうまく生活できなかったらどうしよう」などの不安感は頭の片隅にもなかった。しかし、今考えればそれが最大の問題だったのかもしれない。挑戦を決意する段階で、その困難や苦勞についてもよく考えておかなかつたせいで、「やっぱ怖そうだからやめた！」なんて気軽に言えなくなった今になって初めて、留学に対する「恐怖」が浮かび上がってきたからだ。少し想像をするだけで、留学に行ったら両親や友達に会えなくなるだとか、アメリカは日本より危険かもしれないだとかいう不安で、頭がいっぱいになってしまふ。考えれば考えるほどその挑戦が恐ろしいものに思えてきて安易に挑戦を決意した自分を恨んでしまふ。だが、挑戦したいと言い始めたのは自分だし、その挑戦を応援してくれている両親には心配をかけたくなかつたため、このことを誰かに相談することもできなかった。そんな風に一人で苦悩しているときに私はこの言葉に出会つた。

「楽しんで失敗する方が、退屈しながら成功するよりずっといい。」
これはアメリカのコメディアンであるジョージ・バーンズの言葉である。「失敗」を過度に恐れていた私にとって、この言葉は救いとなった。それすらも楽しんでしまえば、「失敗」は何も恐れることはない。そう考えると、心の靄が一気に晴れ、体の内側から活力が湧いてきた。留学に対する「恐怖」について考えてみても、「私ならなんとかできる！」と自然に頭の中で前向きな気持ちに変換されるのだ。目標に向かって走り出すと、大変なことや辛いことばかりに目がいつて、いつの間にか、初めに持った「やってみよう！」という感情や、挑戦自体を「楽しむ心」を置き去りにしてしまつていた。この言葉はそんな私に「挑戦への向き合い方」を教えてくれた。

もし、私がこの言葉に出会っていなかったら今頃は留学プログラムを中断していたことだろう。さらに留学を中断した経験が足枷となって、新たな挑戦への好奇心もわかなくなっているかもしれない。この言葉はこれからも私の波乱万丈な人生をさらに面白くしてくれるだろう。